

学位論文題名

西フリジア語文法

－現代北海ゲルマン語の体系的構造記述と  
ゲルマン語類型論構築のための基礎的研究－

学位論文内容の要旨

本論文の構成は大きく「音韻と正書法」および「形態と統語」の二部に分かれる。第一部はさらに、I 母音、II 子音、III アクセント、IV 正書法よりなっている。

母音に関しては「鼻音化」を北海ゲルマン語の歴史的特徴である、摩擦音の前でのnの消失と関連づけて説明し(西フ goes/英 goose 対 独 Gans/蘭 gans) (§ 8)、また「割れ」と「短母音化」の類似と相違を明らかにしている (§ 9、10)。

子音については「tの脱落」のさまざまな場合を「語末音の無声化」 (§ 14) と「摩擦音化」 (§ 18) との関連で、基底形からの派生を通じて説明している。ある音が隣接する音の影響を受けて、発音の方法や位置をその音に近づけるかあるいは同じ音になる現象を「同化」 (§ 19) と呼ぶが、本論文では「同化」を、後続する音が先行する音に影響を与える逆行同化に限定し、西フリジア語における順行同化を、厳密には逆行同化とは性格を異にする音素配列論の制約によるものと見なして、同化から除外している。この点に本論文の特徴がある。

質量ともに本論文の中心をなす第二部の「形態と統語」では、品詞別にまとめて扱う伝統的な方法を採用し、文の構造はそれぞれ関連の深い品詞の項目で論じられている。例えば、枠構造は従属接続詞の章、中域の目的語の語順は代名詞の章、右枠の動詞群の語順は動詞の最終章というように。

品詞としてはI 冠詞、II 名詞、III 形容詞、IV 代名詞、V 数詞、VI 副詞、VII der、VIII 前置詞と後置詞、IX 接続詞、X 動詞 の10品詞が立てられているが、以下、本論文の記述の特徴的な点に即して述べる。

代名詞に関しては、人称代名詞2人称単数親称 do/敬称 jo の区別をドイツ語の du/Sie、オランダ語の jij/u と比較して示し (§ 37-3)、比較言語学的視点を採り入れ、さらに敬意表現を敬称・親称だけでなく、親族名称 (heit 「お父さん」)、役割名称 (dokter 「先生(医者)」)、所有代名詞複数形 (ús heit 「(私の) 父」 ús 「私たちの」) の使用に拡大して (§ 40-3)、社会言語学的説明をも加えている。また人称代名詞の連接形3人称単数男性・両性形 er は、独立した1語として綴られるにもかかわらず、その現れる位置から考えても統語的接語 (clitic) と見なす方が妥当だとして、音韻的接語としての「弱形」から区別されている (§ 38-2、3)。このようなドイツ語、英語、オランダ語との比較は本論文全体に渡って頻出し、文法現象の説明も、慣習的表記に囚われることなく理論的考察を加えているところに本論文の特徴が見られる。また随所になされている社会言語学的説明は、数多くの質の高いインフォーマントに基づく豊富な用例を駆使することによって説得力を持ち、生きた言

語としての西フリジア語の現状を如実に伝えている。

本論文の品詞分類の特徴は、多様な *der* を一品詞として立てている点である。*der* の機能は「代名詞の*der*」「場所の*der*」「存在の*der*」「虚辞の*der*」に4分類されており (§ 54 ~ § 58)、通常の品詞分類とは異なる立場からの記述が行われているが、これは西フリジア語特有の現象をより忠実に採りあげるための工夫のひとつと言える。

前置詞・後置詞では名詞句を支配するもの (§ 62) と前置詞句を支配するもの (§ 63) に分けて詳述し、接続詞では従属文を導く *dat* に加えて、主文を導く *dat* の存在を指摘する (§ 67-3) など、対象言語に即した記述を徹底させている。

動詞については、語形変化による動詞の3分類を徹底させることによって、従来の文法書の不備を訂正する (§ 69) と共に、現存する文法書における動詞の時制・人称変化の異同を詳細に比較検討して Eisma (1989) の規範的分類を実証的に批判している (§ 70 ~ § 73)。また、態 (ヴォイス) に関しては、受動態、再帰動詞、使役動詞と並んで、能格動詞、中間動詞、非人称構文にも言及して説明している (§ 82)。

ゲルマン語、あるいは広く印欧語としても特異な現象として類型論的に興味深いトピックである「名詞抱合」については、「類別的名詞抱合」/「形容詞抱合」の存在にも言及し、「小辞抱合」が存在しない理由についても考察している (§ 83 ~ § 85)。また、ドイツ語やオランダ語にも共通する分離動詞の「擬似的性格」について注意を喚起し、分離動詞と非分離動詞という性格が全く異なる両者を対比する伝統的取り扱いについて批判している (§ 86 ~ § 88)。さらに接頭辞 *be-* による接頭辞動詞 (非分離動詞) がドイツ語やオランダ語に比べてはるかに広範囲の使用領域を有する事実を指摘し、その理由を接頭辞 *ge-/er-* が存在しないことに関連づけて論じると共に、接頭辞動詞 (非分離動詞) の体系性を指摘している (§ 87, § 88)。

接尾辞と品詞転換による派生動詞について詳細に解説し、接尾辞と加音 (*augmint*) を明確に区別している。また、接頭辞は接尾辞と異なって品詞転換することはないという事実注意到意を喚起し、「名詞から派生した *be-* 動詞」などといった従来の語形成的解釈を訂正している (§ 89 ~ § 91)。

不定詞を「第1不定詞 (*e-* 不定詞)」「第2不定詞 (*en-* 不定詞)」「第3不定詞 (命令不定詞)」の3種類に分類し、それぞれの用法をきわめて詳細に解説している (§ 94 ~ § 98)。とくに Hoekstra (1997) の「*te-* 第2不定詞」4分類に基づいて、ドイツ語、オランダ語、英語との比較を交えながら詳述し、西フリジア語の特徴である「*en+* 第3不定詞構文」をも詳細に説明している。

右枠における動詞群の語順について、「左枝分かれ型」、つまり、支配される下位の要素が支配する上位の要素の左側に置かれる西フリジア語が、「右枝分かれ型」のオランダ語と鏡像関係をなすことを確認し、対比例を豊富に列挙している。さらに不定詞を支配する過去分詞が代替不定詞として現れる「IPP-効果」(*Infinitivus pro participio*) および「代替不定詞」が西フリジア語には存在せず、オランダ語には規則的に存在し、ドイツ語にも部分的に認められる事実を「右側の要素が文法上の特性を決定する」という語形成の形態論的原則から説明している (§ 99)。

巻末の「フリジア語群の三つの生態と多言語使用」では、日本国内のみならずドイツでも誤りが目立つフリジア語の記述について、歴史言語学的、社会言語学的視点を交えて、正確な知見に基づいた総説を提供している。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 植 木 迪 子

副 査 教 授 山 田 貞 三

副 査 助 教 授 藤 田 健

学 位 論 文 題 名

## 西フリジア語文法

－現代北海ゲルマン語の体系的構造記述と  
ゲルマン語類型論構築のための基礎的研究－

審査委員会は、本論文が提出されて以後6回にわたって委員会を開催し、申請論文を慎重に精読して審査すると共に長時間にわたる口述試験を実施し、十分に審議を重ねて適切な評価に努めた。その結果、本論文に対する以下のような評価に鑑み、審査委員全員が一致して、清水誠氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達し、文学研究科教授会に報告した。教授会は、この報告に基づき審議を重ねて、これを承認したものである。

本論文は西フリジア語の標準語にかんする音韻と文法の体系的記述である。

フリジア語はフリースランド語とも呼ばれ、インド・ヨーロッパ語族のゲルマン語派に属しており、歴史的に北海ゲルマン語の唯一の後裔である。ドイツ北部の話者約1万人の北フリジア語、同じく約2千人の東フリジア語に対して、オランダのフリースランド州で使用されている西フリジア語は、話者約40万人で、オランダの地域的公用語として承認されており、標準語として十分な言語規範が確立している。近年、若い世代を中心にオランダ語からの言語干渉が顕著に見られ、このことを意識して標準西フリジア語の言語規範は、オランダ語の影響を極力排して西フリジア語としての独自性を強く打ち出しており、この言語擁護の姿勢は社会的に広く認められている。このような状況のもとで、本論文は西フリジア語に特有の現象を積極的に採りあげ、文章語として確立された標準西フリジア語の体系的かつ包括的な記述文法を提示している。

西フリジア語の代表的文法書としては、19世紀後半以来、十数点を数えることができるが、記述の詳細さ、豊富な例示、比較言語学、歴史言語学、理論言語学的考察に基づく包括的なものとして本論文の右に出るものはない。本論文の形態および統語にかんする記述は、品詞毎に展開するという伝統文法的手法に基づいているが、随所に理論統語論、とりわけ生成文法の先行研究の成果を取り入れながら著者独自の分析をも提示している点で、単なる記述文法のレベルを超えた論文となっている。またゲルマン語類型論を研究テーマとしている日本人研究者としての視点を活かして、ドイツ語、英語、オランダ語、北フリジア語などのいわゆる西ゲルマン語に加えて、北欧スカンジナビアの北ゲルマン諸語を、古語を含めて広く参照すると共に、従来とかくオランダ語話者向けの説明に片寄りがち

であった西フリジア語の記述を、より広範な研究者の用に供する工夫が随所に見られる。

本論文は西フリジア語の包括的かつ体系的構造記述として現時点において世界的に比類のないものであり、今日までのフリジア語学の主要な研究成果のほとんどすべてを吸収し、現地の研究者および母語話者との多年にわたる密接な実証的調査と理論言語学的議論を重視した貴重な研究である。音韻、形態、統語の各レベルにおいて極めてバランスのとれた記述文法になっており、著者の同言語に対する深い見識が示されている。とくに音韻・形態に関する記述および分析は詳細にわたり、歴史言語学の観点からも展開されているために説得的なものとなっている。なかでも形態論に関する分析は、語形成に関わるもののみならず、統語レベルにおいて問題となる形態統語的な現象も扱っており、形態論と統語論に関する著者の極めて高い次元の問題意識が示されている。特に語順に関する記述は詳細で、この部分だけでも言語学的に大きな貢献をなすものと言える。生成文法の先行研究の成果をとりいれながら伝統文法の手順に従っているために、理論的不徹底が目につく部分があることや、例文に文脈や話者の意図が十分に反映されていないことも指摘されたが、これらはむしろ理論的アプローチの積極性や、活きた言語としての西フリジア語にたいする配慮の結果として評価すべきものであると考えられる。

著者は1994年にオランダのフリスケ・アカデミーの正会員に任命されたのをはじめ、ドイツの北フリジア語文化研究所の運営母体である北フリジア語文化研究学術協会の会員認定に続いて、本年5月にはオランダの在外フリジア人協会への名誉会員への推挙も受けており、これらの事実からも、本論文に結実したフリジア語研究が本国の学会においても高い評価を受けていることが窺われる。